

## 教育と生命（４）

### －オペラ《天空の街》別子銅山と

### 伊庭貞剛に見る社会派創作オペラの意義－

蔵田 雅之

*Masayuki Kurata*

#### はじめに

筆者はこれまで、「教育と生命」を主題として、（１）声楽における技術と精神、1997年3月音楽学部紀要、（２）共通言語としての現代オペラーオペラ《金閣寺》（黛敏郎、1991年）、1998年3月音楽学部紀要、（３）表現することの根底に流れているもの＝自己克服の芸術化―血縁、地域、時代、不可避な条件をめぐって―（自己克服の境界線としてのトーマス・マン「ヴェニスに死す」とそのオペラ化について）、音楽学部紀要2000年3月と論説してきたが、（４）はこれに続くものである。

あらゆる職種における悟性、ウィズダム、知恵の湧出はまた横軸にひとつつながりであるとの命題を（１）～（３）で模索してきた。（１）では、技術的な発声の徹底した探究は終生にわたり声楽家には必須だが、「歌いたい！」との精神の衝動から湧き出る、太古の経験的記憶、と同居するものである、とした。（２）では、オペラ《金閣寺》（原作、三島由紀夫）の根底にある、人々の中に固定化された美が大戦と敗戦という大きな時代変化と価値の極端の変化のなかに戦前戦後不変であることに、肉体的障害をもつ僧が反感をいだき放火するという現実におきた事件をテーマとした。日本と同じ敗戦国のなかで最も破壊されがれきとなったベルリンの、ドイツオペラ委嘱作品は「若者が普遍的な価値基準をもとめてさまよう」という要諦で日本の同時代とつながりを持つ作品の逆輸入、日本初演の意義をのべた。それは仏教の僧侶が悟性、ウィズダム、知恵を探求するうちに時代の価値変化のなか迷路に陥り破滅する、を要諦としている。（３）ではブリテンのオペラ《ヴェニスに死す》が一般的にルキノ・ヴィスコンティーの映画によって単発の作品評価に定まりがちな部分を、原作者が次作『魔の山』の主人公ハンス・カストルプに悟性、ウィズダム、知恵を与え、第一次世界大戦のなか歩みゆくその前篇として、同性愛の極美のなかにわざとのようにコレラの街、ヴェニスにとどまり死する主人公グスタフ・フォン・アッセンバ

ッハをどちらかという、ペシミズム、悲観の否定として描いていることを忠実に描いていることを述べた。わずかの精神のバランスのきしみが死を導く姿が実は主題となっている。『魔の山』のハンスは最初、死への憧憬をもつが、現世とは隔絶された結核サナトリウム、ベルクホーフでさまざまな経験のなかから悟性、ウィズダム、知恵を得る。それはアッシェンバッハの生き方の否定、「死の冒険は生のなかに含まれ、その冒険がなければ生は生ではなくその真ん中に神の子たる人間（Homo Dei）の位置があるのだ。」を提示している。

（１）～（３）はそれぞれ要諦部分にそれを測る物差しはないが、普遍的な悟性、ウィズダム、知恵の探究というテーマでは接近している。

### 1. 別子銅山と伊庭貞剛の植林事業

市民参加型のオペラは、国内の地方都市でこれまで多数展開されて来た。伝説や特徴ある自然、独自の風習、信仰、偉人、名産品などを題材とし、原案、原作を基本にオペラ上演台本が書かれ、音楽が作曲される。地域ゆかりの音楽家、指揮者、演出家などが市や町村の助成などを得て地域の合唱、舞踊、オーケストラも参加繰り広げられる場合が多くみられる。こうした音楽文化の地域発展にオペラが究極のものとされていることは意義深い。市民参加型オペラには《カルメン》、《椿姫》、《フィガロの結婚》などグランドオペラのスタンダードな世界的名作が取り上げられることが多いが、地域のみの人々が詳しく知る題材のオペラ化は参加者の連帯意識を深めモチベーションを高くし、また皆で作成してゆくという喜びもともなうことから再演されることも多い。これらは創作オペラと呼ばれてきた。

2012年愛媛県新居浜市で初演された、石田エドワード台本、作曲のオペラ《天空の街》は地域ゆかりの住友別子銅山支配人、伊庭貞剛を主人公としている。伊庭が住友の別子銅山の開発や製錬から生じる煙害、それによる森林の荒廃、これを起因とする水害、また鉾山を維持しながら精錬所を海上の島に移築するなど、莫大な費用をかけての植林事業などに奔走する姿を描いている。大自然への畏敬がその根幹にある。

欧米列強の植民地政策に飲み込まれないようにと化学工業、鉄道、軍事産業、造船など近代化を急ぐ時代の風をうけながらそのエネルギーの源＝別子銅山の支配人たる伊庭が時代の要請とはある部分で正反対の行動をとる姿を忠実に再現した意欲的ないわば社会派オペラである。

初演の2回公演はおよそ1600収容の新居浜市民文化センター大ホールが満席になる盛況ぶりで、本年まで毎年2か所以上、日本全国ですでに20回以上の移動公演を実施している。2014年にはポルトガルの首都リスボンのエストリル音楽祭の演目にもとりあげられ好評で

あった。一企業である、住友の繁栄やその背景にあるものをオペラの題材とすることは珍しい。またこのような作品がその後も、新居浜以外の地域で継続公演されることは地方都市発の社会派創作オリジナルオペラのありかたのモデルとして注目される。「創作ものはやはりその地域のみにて花開く」、という常識をくつがえしている。その要諦は鎖国解除、開国、富国強兵、へのみちのりで、まだ公害という単語もない時代に大自然と大企業の共存というなかなか現在でも上演台本には成りがたいテーマに着目していることが大きい。

しかし伊庭自身がそうした当時の時代感覚とは距離を置く価値観をあらかじめもっていたかというところではない。都市とは隔絶した別子銅山に当時、「あかがね」、とよばれたエネルギー源、「銅」、採掘製錬のために形成された空中都市、すなわち天空の街には往時おおよそ 20000 人がくらししており、新居浜から険しい山道を 1 時間以上のぼりつめた大自然のなかの天空の街、空中都市には学校、病院、スーパーはおろか、歌舞伎の為の本格的劇場まであった。現在もその生活の痕跡は管理された史跡として詳細にみることができる。

一方別子山を主軸として連なる見事な大自然は現在でも伊庭の尽力もあり、東洋のマチュピチュとよばれるように緑豊かな原始の世界が保たれている。伊庭は空中都市別子と新居浜、原始の大自然を行き来するなかで神秘体験を実体験しており、ここから銅の採掘、製錬とは真逆の植林という事業を企業生産拡大基調の風土のなか繰り広げる。その本数は 1 年に 100 万本であった。これらは足尾銅山が製錬の煙害で丸禿となったものを放置していたら、水害を防御できずに多数の死者をだす大公害がおこった、これは生産を急ぐあまり自然の摂理を無視した人災でないか、の教訓でもあった。

石田エドワードの台本、作曲は同氏の長いオペラ歌手、指揮者、作曲、台本制作の経験をもとに実際に新居浜に居住しながらの取材を基本とし、作曲、初演に向けては別子公民館に全国からソリスト、合唱、オーケストラメンバーが結集し、主人公の伊庭の歩んだ道をたどりながらセミナー合宿が敢行された。当地は山深い場所にあり、商店など全くないまさに天空の街であった。また地域のキャストより、別子のゆわれは、当地が作物の育たない土壌であり親が子供を送り出すおりは、泣きながら子別れをした、故に別子であると聞いた。

筆者はこの作品のなかで伊庭の叔父、住友初代総代の廣瀬幸平を演じる機会を得て初演以来公演に参加してきた。廣瀬は伊庭と正反対のポリシーで住友を牽引した人物である。

公演のための合宿から初演、全国展開、海外公演に参加してすでに 4 年が経過したが本年も大阪市、入間市で継続公演され、大阪市の 2 回公演には同役で参加した。伊庭貞剛の足跡は本拠、新居浜市では意外にも評価はまちまちであり、理由はまず伊庭が生粋の地域の人物でなく短期の支配人であった時期の足跡をたどるものであるからであろう。これに対し廣瀬邸や廣瀬公園が新居浜市に保存されているように、廣瀬の当地での評価は高く石

田台本はこのやや不当な伊庭評価にも一石を投じている。その台本は歴史的背景にも実際の人物表現にも実際のものにきわめて忠実に描かれ信頼度が高い。公害やましてエコロジーの単語すらない時期に未来をみこした伊庭の足跡は当時としては常識はずれだが現代の視座からは偉大であり真逆の主張、展開をした廣瀬の役どころからこの作品全体を見渡すことができた。

公演は継続しており

2012年 新居浜市民文化センター、2回公演\*

東京オリンピックセンターホール、2回公演\*

2013年 福岡市中央市民センター

東京サンパール荒川\*

新宿文化センター大ホール\*

新居浜市民文化センター、2回公演\*

八幡浜市ゆめみかんホール

長崎市松浦市文化会館

2014年 東京オリンピックセンターホール\*

新居浜市民文化センター\*

琵琶湖ホール（大ホール）\*

ポルトガル・リスボン、トリンダーテ劇場（エストリル音楽祭）\*

長崎市佐々町文化会館\*

2015年 松山市総合コミュニティーセンター\*

四国中央市ユウホール\*

2016年 大阪国際センター\*

入間市文化会館

（\*は筆者参加公演）

2017年 入間市文化会館再演予定、東京オリンピックセンターホール公演予定

このように、毎年新居浜以外の都市公演を展開しているが多くの各地域のソリスト、オーケストラ、コーラスを募集、長い稽古期間をとりその間、原作者、石田本人が指導にあたってきた。また短縮したハイライト上演も上記以外に多数展開している。先に記したように、地方都市発の社会派創作オペラが別都市にて継続的上演されてきた理由は「別子銅山」という地域性をはなれてもこのオペラがいかなる時期、時代、場所を選ばず存在する普遍的なものを語ることにある。それは企業家である伊庭が大自然の中に見出した普遍的な価値と少なくとも当時の企業、鉱山のありかたからは真逆の実践行為を行ったことに意

味を見いだせるものである。産業拡大の時勢、近代化の風のなかで正反対に思える大自然への畏敬を行動で実現した伊庭の歩み、またそのオペラ化が語るものを参加者のひとりとして記してみたい。

## 2. 別子銅山の沿革

石田エドワード台本は史実にきわめて忠実であり元禄時期に別子山に銅の鉱脈を発見した切場長兵衛が住友の田向重右衛門にこれを告知、秘密裡に大鉱脈を確認する事実もこの2人を配役し、おりこんでいる。切場による発見は1690年、採掘は1691年から1973年まで続した。住友により採掘され日本の近代化の原動力となった。また財閥住友の基礎を作った。一方鉱毒事故、煙害による農作物への影響による暴動などがおきるなど公害も多発した。1698年には国内最高量を採掘。別子は愛媛県、新居浜市から別子山に向けての山麓にあり、ふもとにあるマイントピアは銅山の記念館となっている、別子の鉱山と集落はここから山道を40分のぼりつめた場所、東平（とうなる）にあり往時の生活の痕跡がこれも保存されている。マイントピアのほうは市街地からさほど距離もなく観光地化されているが鉱山と集落は国道から集落に至る道が特に険しく実質一方通行幅の道を観光客がおとずれるため、トランシーバーで上り下りが通信しながらの道行きである。突如見開ける鉱山はこのような山肌に20000人の人々が生活していたとはにわかには信じられないほどの深山幽谷のなかにある。廣瀬幸平が支配人となったのは1865年慶応元年であった。1868年には大政奉還、明治となったが廣瀬は接收されて土佐藩のものとなった銅山を住友家の経営とすることに成功した。1882年精錬所、1893年鉱山鉄道開通、1899年大水害が発生521人が犠牲となった。鉱山は東延から現在鉱山集落跡を保存する東平（とうなる）へ下りさらにマイントピアのあるふもとまで堀り下がる形をとった。江戸、明治、大正から昭和へと採掘は継続された。

## 3. 廣瀬幸平と伊庭貞剛

廣瀬幸平（1828-1914）は現滋賀県野洲町、野洲郡八夫村生まれ、北脇家の次男であった。幼名は駒之助、別子銅山の支配方であった叔父、北脇治右衛門との縁で別子銅山にて奉公することになる。当地で住友の廣瀬家の養子となった。1865年に銅山の近代化を訴え支配人となった。大政奉還のおりには住友に経営権を継続させることに成功した。フランス技師の招聘、鉄道の開通など銅山事業の近代化に大きく足跡を残したが、公害をひきおこしまた住友総代として合議制を弱め独裁体制をしいたため1894年辞任している。伊庭貞剛（1842-1926）は廣瀬と同じ琵琶湖畔、現近江八幡市、西宿村に長男として生まれ幼名は耕

之助、廣瀬幸平は実母の実弟にあたり叔父、甥の関係であった。公職歴任のち維新期の気風が消え官界の媚びるような世界に落胆して、故郷にかえった。このとき幸平にすすめられ住友に入社。大阪本店支配人となり廣瀬の片腕となって活躍。政界にも進出した。1893年新居浜の精錬所煙害で暴動がおこり、紛争解決のため支配人として赴任した。廣瀬と対照的なのは支配人として経営上必須の経済維持に力を発揮したのみならず、経営者側と鉱夫、事務方、その家族たちと頻繁に会いよくコミュニケーションしながら是正してゆく対話形式をとったことであった。その場面も第2幕冒頭にえがかれているが、鉱夫たちはそのような仕事を転々としながら別子に来ている者、やくざもの、などもおりこれらに取り囲まれつるしあげをくらっている。伊庭は事務方が「ここはおまかせください」と守ろうとするのを止めて、一人一人の不満を聞き対話しながら改善を約束、さいご皆で歌まで歌いおさまるとなっている。経営はこの伊庭のやりかたで末端まで意志が行き届いて好転していた。逆に独裁型の廣瀬はそこが欠落していたのである。また伊庭は製錬の産む煙害などに対処するうちに鉱山をとりまく大自然を採掘と製錬により破壊しないようにできないかという思いが常にこころのなかにあった。これは大自然への畏怖、畏敬ともいえるべきものであった。企業家としての伊庭の評価はやはりそこにある。

この2人の対照はオペラ台本のセリフにも歌唱部分にも顕著である。

廣瀬が銅山を住友の資産として守った誇りを歌うアリア〈誰が知ろうわがなしたることを〉では

廣瀬幸平；誰が知ろうわがなしたることを

わしが向かうのは日本国家の経済

いったい彼らに何がわかる

この山を愛し、鉱夫たちを養い続け、皆を説きふせ

売却を阻止し、宝の山を守り抜いたのは

いったいだれなのだ

私はもとめた、世界最高の人材を

それで別子銅山を世界一流に近代化して

大阪と日本経済を発展させたのはいったいだれだ

列強の植民地にされる前に経済を立て直さなくては

そうだ皆わしに従え

また台詞の対話では。

廣瀬；貞剛話がある。今の政治家にはもうまかせておけない。このままでは日本は欧米列強の植民地にされてしまうぞ。遅れをとってはおしまいだ。(略) おまえがないと別子銅山の事業もなりたたないから、とにかく戻ってこい。

伊庭；おじさん、別子の社員や鉱夫たちはおじさんをおそれています。もっと理解しあい力をあわせる方法はないのですか？

廣瀬；お前はまだ若い。上に立つ者はすべてを理解した上で、これからのことを熟慮し、そして断行するのだ。わかるか？

伊庭；いいえ、私はみんなと話し合いたいのです、そこから道を拓きたいのです。

廣瀬；馬鹿者！彼らに大所高所に立った判断ができるとおもうか？愚集の言葉に振り回されるな！いま日本が必要としているのは優れた指導者だ。では貞剛、お前のやり方で別子山の混乱を収められるか？どうだ、やってみないか？

伊庭は火中のくりを拾うに等しい混乱の別子銅山に向かう。また、伊庭はかれのポリシードおり、従業員、鉱夫、と毎日山に入り対話をくりかえしながら善処してゆくのであった。鉱山の最大の問題は製錬により銅鉱石にふくまれる硫黄から発する亜硫酸ガスであった。

足尾銅山に見られるように生産重視の時代には公害の文字もまだ存在せず、丸禿状態の山々は放置され煙害は大水害を産み多数の犠牲者を出した。生産第一の勢いのなかで起こるべくして起きた人災であったろう。これに対し伊庭は生産を止めることなく、同じように丸禿となった別子の豊かだった森林をもとの姿に戻せないものかと常に感じるようになる。それは夢のなかでおきる出来事により決定的となるが、なによりも、伊庭は「森を敬い、森に仕えよ、森は神である。」との古老の言葉を胸に刻みつけていたのである。夢のなかで伊庭は、どんどん木を切り倒し豊かさの源である木を粗末にする人間の姿と木に宿る木の妖精のこれ以上木を伐採しないでとの懇願の間に立つ。妖精の姿は伊庭だけに見え、木を伐る人間にはまったく見えていない。夢からさめた伊庭は己が信じていたことが投影されていたことを振り返り、長年追求してきた自身の境地であったと、これを「生精の気」と呼び、伐採された木の復活を決意する。それは年間 100 万本という天文学的数字の実践

であった。この植林事業はそれが実践される前後の写真をみるならだれもが驚嘆する復活、復元の達成であった。これが今日の別子山の美しい雄大な森林であり、また「大自然にお仕えする」との住友林業の社訓へとつながるようである。さらに伊庭は煙害の源である精錬所に着目する。それは海上の四阪島へ精錬所を移築するという大胆な発想であった、海水を真水に変える機器も生まれこの移築も伊庭は実践にうつす。これにより、別子山の木々は煙害を完全に回避したのである。移築についても、次元のことなる世界からの形で猛反対を廣瀬は投げかけるのであった。これは住友本社での理事会で、社員から利益を視座からはずした経営は他者に利を奪われるのではとの疑義に対する対話のなかである。

廣瀬；やめろ、貞剛！四阪島に移せば住友は企業として成り立たなくなるぞ！従業員の生活はどうなる、その家族は？新居浜の住民全ての生活はどうなるのか！これは老人の跋扈ではない。責任ある企業にとって、妥協も時には必要だ。老人であろうと、誤りを知りて言わざるは不忠なり。逆明利君、これを忠という。

(中略)

伊庭；私は夢物語を言っているのではありません。今後の採算も全て熟慮した上での計画です。それにみなさん、大自然があつて初めて私たちはいきられるのです。大自然にお仕えする気持ちで、この住友にしか出来ない全世界の為の事業を展開して行きましょう。

この伊庭の叫びは、現在では敗戦の無惨と、その後の超高度成長、その無秩序が生んだ公害の反省を経験したのちの言葉としては普通だが当時としては革命であった。伊庭は年間 100 万本の植林と、精錬所の海上移築の断行により、別子全山をその言葉どおり、青々とした大自然の姿にもどし次世代に渡したのである。つまり企業の生産を止めることなく先人たちにより丸禿となった山々をよみがえらせたのである。他方、四阪島の精錬所から発する煙はまた、今治方面の農作物に被害をもたらした事実もあった。これには。

「人にはできることと、できないことがある。決しておごるまい。」



と述べている。

大自然を敬い、森は神である、とし、それを企業人として実践した伊庭は引退するが、引退後著名な庭師である小川治兵衛が留守宅を訪ね、伊庭の末娘と伊庭が作成した庭を眺める場面も象徴的で美しい。

敏子；小川様、わざわざこんな田舎までありがとうございます。せっかくおいでくださったのに父は今でかけておりまして。

小川；いいえ、瀬田まできたついでに立ち寄っただけですから。

敏子；日本一と言われる小川様にお見せするのはお恥ずかしゅうございますが、これが、父が作ったお庭です。

(長い沈黙)

小川；—————負けた。伊庭さまは「庭」を作っていません。ただ木が植わり、芝生があるだけです。敏子さん、なぜ負けたと言ったかというと、所詮人間は自然にはかなわないということです。どんなに英知を尽くして池を作ったり山を作ったり、石を置いて木を植えて、いくら自然に似せようとしても、所詮自然にはかないません。伊庭さまは最初からそれをわかっていたから庭を造らなかったのでしょうか。

オペラ《天空の街》のもう一つの特徴は、近代化に不可欠であった鉱山と製錬から生じる公害を主人公が克服してゆく本編を別子山の昆虫たち獣たちがプロローグ、エピローグに登場する旅人とともに大自然の側から振り返るドラマとしたところにある。この旅人と虫たち、獣たちを演ずる子供の合唱のウエイトは重く歌われる曲も多彩である。まずプロローグでは

- 1、＜ 青空高く＞
- 2、＜ダンザンバン＞
- 3、＜こんなに空が＞

またエピローグでは

- 1、＜ワンガラナイ＞

- 2、〈いろは革命歌〉
- 3、〈こどもたち〉
- 4、〈こんなに空が2〉

このうち、〈ワンガラナイ〉、〈いろは革命歌〉、は高名な自然農法の福岡正信の詩を使用している。石田エドワードと福岡は悟性の絆でつながっている。またこのオペラの主人公、伊庭の結論は、「大自然におつかえする、森は神である」にある。全編最後にカーテンコールで歌われる、〈別子山の歌〉、は高揚感を呼び覚まし、毎回会場と一体となり強い共感を呼んでいる、この詩も福岡正信による、この詩自体が悟性、ウィズダム（知恵）と感じる。（この歌は特にポルトガル公演でも手拍子が会場にまきおこった。）

〈別子山の歌〉（詩；福岡正信）

川は流れて人去り来る　　会うは別れのはじめとか  
 時は流れも進みもしない　　はじめ終わりはなきものを  
 であったいまが久遠の時か　　過去も未来も夢の夢  
 森の泉は枯れはせぬもの　　2人の愛は何時までも　　アイヨー！  
 ヤッコラサ　　エンコラサ  
 お前、百までわしゃ九十九まで　　ともに自然にかえるまで  
 ここが別子山めでたやな

雲は流れて青空高い　　ひとのさだめは風まかせ  
 空は広くも小さくも成らぬ　　西や東はなきものを  
 胸をあわせば心はひとつ　　あなた私の国じゃない  
 育てる者はただ一つだけ　　扶桑のもりよ天にまで　　アイヨー！  
 ヤッコラサ　　エンコラサ  
 天にそびゆる扶桑の木々が　　世界の国の橋渡し  
 ここが別子山めでたやな

夢をさがして旅にはでたが　　どこへ行こうかいずこにや

あなた運んだ五穀の種が 瑞穂の国のわが命  
自然にかえる全てを捨てて ここはこの世の桃源郷 アイヨー！  
ヤッコラサ エンコラサ  
野菜花咲き木の実もたわわ 五穀豊穰とき知らず  
ここが別子山めでたやな

浜の足跡どこまで続く 波に洗われ消えてゆく  
浜の千鳥に尋ねてみたら わたしゃ知らぬと鳴くばかり  
愛はひとすじ変わらぬものよ 寄せては返す波の音  
潮の流れに運ばれてゆく 平和の願いがめぶくところよ 別子の山 アイヨー  
ヤッコラサ エンコラサ  
何もないのだすべてがあつて 世界ひとつと歌いあう  
ここが別子山 めでたやな  
ここが別子山 めでたやな

この詩にこめられたメッセージそのものがオペラ《天空の街》本編のメッセージとなっている。

創作オペラで一企業の物語を本編にすえながら、一方、大自然と人間の関わりのあるかたを強く問いかけくのがオペラ《天空の街》である。この作品は石田本人の指揮によりご当地新居浜で初演後全国展開しているが、フルサイズのオーケストラから、キーボード1台による公演まで可能である。また時代設定が明確であるが、テーマの普遍性故読み替え演出のモダンな上演も可能であると感じる。財閥の始動が鉱山と採掘製錬にあったことは興味深いが、国家を動かすエネルギーを限りあるものとして頭のなかで理解できても、そのエネルギーをどのように保持しまたいずればつきてしまうであろう宝をどう使用すべきかに着目した伊庭の歩みは偉大である。年100万本の植林はただちに森林を復活させるわけではないが、事実が示すようにやがて閉山にいたった銅山の衰退への時間、繁殖し衰退とは逆のベクトルをえがきながら再びよみがえり、またふたたびエネルギーともなる機会を待つものとなったのだから。エピローグで、再び旅人や別子の昆虫、動物たちがあらわれ、

「どうだいおまえたち、お前たち、人間にもいろいろいるが、伊庭のような人間も  
いいものじゃろ。そう、かんがえてみれば人間も、この山のお前たちのような自

然の生き物も、みんなひとつの命として繋がっているのじゃのう。」は本オペラの命題である。

企業人、実業家であった伊庭が別子銅山の開発、煙害対策、精錬所の海上移転、年 100 万本の植林事業を展開する史実のオペラ化は、また主人公の悟性、ウィズダム、知恵の道行きのオペラ化に他ならない。

オペラ《天空の街》作曲・台本 石田エドワード

#### 配役

旅人 (バリトン)  
伊庭貞剛 (バスバリトン)  
少年 貞剛 (語り)  
母 田鶴子 (廣瀬宰平の姉) (メゾソプラノ)  
最初の妻 松 (ソプラノ)  
その娘 はるこ (子役)  
二番目の妻 梅子 (ソプラノ)  
その子供たち (子役)  
廣瀬宰平 (テノール)  
大島 (バリトン)  
切上がり長兵衛 (テノール・レジェット)  
住友友純 (ハイバリトン)  
塩野 (テノール・レジェット)  
小川治兵衛 (語り)  
峨山和尚 (バリトン)  
品川 (ハイバリトン)

品川の娘（語り）

森の精 1, 2（ソプラノ）

別子山の昆虫、鳥、獣たち、花たち樹木（児童合唱、混声合唱）

女たち（物語にコメントしてゆく）

別子銅山鉱夫、役員、事務員（男声）

住友本社役員、社員（男声）

オーケストラ；二管編成フルサイズ、和楽器（尺八、篠笛、琴、和太鼓など）

オペラ《天空の街》に全国展開で廣瀬役、旅人役などで多数出演した。地域の合唱団やオーケストラ、声楽家との交流を通じて作品の要諦を理解しながら上演に参加してこの作品のもつ魅力は日常を音楽とは離れた仕事にたずさわるかたがたの熱演にこそあるのではと感じたのである。伊庭貞剛、石田エドワード、福岡正信が追求した普遍的な人間の価値、大自然にお仕えするところ、とはそのようにあらゆる業種に普遍的なものとして存在しているからである。つまり悟性、ウィズダム、知恵を追求した本編をあらゆる社会の業種の人々が演ずるという構図となっている。作品の命題、悟性、ウィズダム、知恵はまたそのおのおのの業種の普遍的、悟性へとつながるものなのではないか。

## 参考文献

オペラ《天空の街》上演台本 石田エドワード著（東京オペラ協会 2013 年発刊）